

私の見た地中海の沿岸

濱田青陵

一、東地中海

マルタとシチリアのあたりで地中海を東西に分けるならば、私の見たのは東地中海の一部分に限られて居るのみならず、亞細亞と亞弗利加の兩洲に屬する部分には全く足を踏み入れたことは無く、アドリヤ海はたゞヴェネチヤとバールに立寄つた丈であつた。併し佛蘭西のリヴィエラから伊太利のリヴィエラ、古へのエトルリヤの海岸を沿ふてカラブリアの岸を汽車で走り、シチリア島の周圍を繞り、希臘の半島を殆ど一周してクレタ島にも渡つたから、東地中海の海岸は可成見た方とも言へるかも知れない。併し其れはたゞ一般の旅客と同じ様に見ただけであつて、地學者ならぬ私には、其の方面の面白い觀察のあらう筈はないのである。たゞ此

私の見た地中海の沿岸

の世界歴史殊に古代の歴史に最も深い意義のある地中海 (Mare internum) は、埃及、西亞、クレタ、希臘、伊太利の古い文明の交易市場であつて、チャイルド、ハロルドならぬ考古古の一書生をして生涯の間にとても忘れることの出来ない印象を此の海岸に止めしめた。それで今其の感想の一端を記してたゞ會遊の思出としよう。話は先づ佛蘭西の南リヨンの灣から始まる。

二、プロヴァンスの海邊

ローヌスの河口は古くミケーネ時代から希臘文化の影響を受けてゐたことは、馬耳塞が希臘のマッサリヤの址であることでも分かる。併し希臘羅馬のそれよりも此の海岸で我々の感懷をそゝるものは、中世以後殊にプロヴァンス (Provence) の歴史に若くは無い。ローヌヌの沖

積した沙洲と、海から吹きまくる黒風ミストラルとは此の岸邊に不斷の戰を挑んで、其處にクロウ(Crow)の小石原と、カマルグ(Camarque)の荒野を現出した。エイグ・モールの城址は中世の亡き骸を残し、アールの町は「アレジエンヌ」の美はしい姿と共に昔ながらの面影を止めて居る。

私は此のプロヴァンスの海岸にさまよつて、ボンダガールの羅馬の古橋を訪ひ、ニームに「メーゾン・カレ」の遺構を見、タラスコンとボジケールにトロヴァドールの詩人の昔を忍んだロマンチックの旅を思ひ出さずに居られない。嗚呼あのルムーランの老大尉、メナール翁、さては小さい旅館の親切な人々、今はどうして居るであらうか、メ翁からは其後二三回の便りはあつたが、何時此等の人々に再會を期することが出来よう。

私はプロヴァンスの心ゆく昔語りど、其の懐しい文學に就いて今述べ出す暇を持たない。それはドウデーとミストラルの文章に譲つて置くが、たゞ巴里の旅館を出發する前に、プロヴァ

ンスの旅の床しさを語つて呉れた同宿の婦人ど、汽車中で耽讀したベーターの「文藝復興期」に御蔭で面白い旅を済まし得たことを感謝する。

三、佛蘭西のリヴィエーラ

プロヴァンスから東佛蘭西伊太利の國境を経てゼノアに至る海岸は世にも美はしいリヴィエーラ(Riviera)の海岸である。リヴィエーラとは伊太利語の「海岸」の義であるが、こゝこそ海岸中の海岸であるから此の名を得たのであらう「碧緑の海岸」(Côte d'Azur)の名も世に偽ならぬ様である。

併しこれは唯だ海の色が碧緑であるばかりでは無い。大空も亦同じ翡翠の色を漂はして居る南を受けて太陽の光澤なる海岸には南國の植物が茂つて、「ミストラル」の黒風も此處には吹き荒まない。洵に天恵の樂土は歐洲の此の海岸に勝るものがあるまい。カーンヌ、ニース、モンテ・カルロ、メントーンの美しい町々は此の岸邊を縫ふて、其の赤い屋根、白い壁は、自然の

添景をなし、着飾つた女性の姿は更に人間の美
はしさを此處に集めて居る。

夢の様に楽しく暮したニースの二ヶ月の追懷
は、セイス老先生を中心として、走馬燈の如く
私の心鏡に去來する。何を取り出で何を記す可
きかを思ひ迷ふばかりであるが、たゞハーン夫
人に伴はれて、伊佛國境のあなたグリマルヂの
洞穴に舊石器時代の遺跡を尋ねたことは、私と
して愉快な仕事であつた。此のグルマルヂの人
間も數千年の昔氷河のはびこつた時代に、此の
日當りのよい南向きの海濱に其の住居を撰定し
て避寒の土地としたものに違ひない。

四、エトルリヤの海岸

「非常に美しいが健康には惡い」(Dilettevole
molto e poco sana)と十四世紀の詩人の言つた
「マレムマ」の海岸はピッサから羅馬の邊まで續い
て單調なエトルリヤの海岸の特徴を竭して居る
此の古へのテレネ海(Mare Tyrrhenum)に沿ふ
た廣々とした野山、美しい木立、その何處に瘴
癘の氣が潜んで居ると想像することが出來よう

私の見た地中海の沿岸

否な昔エトルスキの盛んな頃は到る處排水の設
備を完ふして、此のエトルリヤの地は決して今
日の如く不健康の場處では無かつたのである。
之を今日の如く荒れ果てた土地にしてしまつた
のは全く人間の怠慢である。

タルクイニ、チエルヴエテリ、グエイをはじめ
幾多のエトルスキの古市は此の見捨てられた野
と山に残つてゐる。斷絶した石壘、壁畫を以て
飾られた古墓、此等を漁り歩いてエトルリヤの
海岸に日を暮し得るのは考古學者の特權であ
る。

私は林大使に伴はれてグエイの遺蹟を尋ねた
日を忘れることが出來ない。圖らずもメンガレ
リー氏と知り合つて、チエルヴエテリーの遺蹟
を案内せられ伊太利の田舎人の純朴さを味つた
事を喜ばざるを得ない。而して又たコルネートの
エトルスキの古墓にかりくらして、人なつか
しい男女の一團と親しくなつた不思議な經驗は
此の荒れ果てたエトルリヤの海岸に於ける唯一
の挿話として、私の生涯の歴史を飾る一のエピソード

ソードとして長く記憶せられるであらう。

五、オスチャとアンチヨの海岸

テベレの流れはオスチャの海に入つて、此處に羅馬の海港を形造つてゐる。世界の霸王羅馬の咽喉は此の掘り出された小さいオスチャ（*Ostia*）の港であつた。テベレを溯つて羅馬の町に這入つた小船は、橄欖の油と葡萄酒の瓶を其處で容れかへて、モンテ・テスタツチヨの丘陵をなしたことを思ふ時には、羅馬の盛時に此の海岸が如何に活動繁華な舞臺を現出したか之を想像するに足るものがある。而して今日の浦淋しい光景と對照して其の變遷の著しいのに思ひ入らないものはあるまい。七つの丘の古都に流連してア女史と一處にオスチャの海岸に筈を曳いたのも最早昔語りになつた。

アンチヨ（*Antio*）とネツツノ（*Netuno*）の海岸も羅馬人の行樂から取離すことの出来ない處である。羅馬の昔には此處に貴族上流の別墅が立ち並んで居たが、今はたゞ累々たる廢墟が岸邊の浪に洗はれて居るばかりである。ネツツ

ノにはかのネロ帝の離宮があつたと言ふ。羅馬を訪づれる旅客は、其の近郊に在る此等の遺跡を尋ねて、始めて羅馬人の生活を髣髴することが出来る。而して今日羅馬に住む人も此の海岸とアルバノ山に暑を避けて、始めて焼け焦がされたカムバニヤの野の苦熱から遁れることが出来る。

六、ナポリ灣とフレグラエの野

伊太利の海岸線はアドリヤ海の側にせよ、テレネ海の側にせよ、頗る單調で何等の屈曲もないのが普通であるが、たゞ其の例外の一はナポリ灣の部分である、これは伊太利の南北を貫き北の方ベリチの山から南方ストロムボリの島、エトナ山に至る火山脈と、東西に亘つてヴォルチユーレ山からポンツアの群島に至る火山脈とが、此處で交會して地形上に大變動を起さしめた結果に外ならない、ジェスヴィオの火山とフレグラエの火山群とは此の如くにして出来、ナポリ灣頭に伊太利の自然の單調を破つて居る。此の自然の變化に富んだ地方は、又た同時に

歴史の錯綜した舞臺を形成して居る。希臘文明はフラグラエの野の一端ク्यूメ (Cumae) に最初の足痕を印し、ボツオリ、ネアポリス (今のナポリ) は東西交通の衝路となつたのも此の灣の賜に外ならない。ボムベイ、ヘラクラネウム埋没して考古學上の大遺跡を残したのは、即ち此の自然の威力が試みた地上の戯である。

伊太利に遊んだものはナポリの聖マルチノの丘、或はカマルドーリの山、さてはボヅリ、ボの阜に登つて、ナポリ灣頭の勝景に見入らないものはあるまい。而して「ナポリを見てから死ぬ」(Vede Napoli e poi muoji) の諺の今更ながら理由のあることを會得するであらう。

七、カプリの琅玕洞と

アマalfイの海岸(巻頭三色版参照)

ナポリ附近で地學者の見忘れてならない遺跡はボツオリの「セラピウム」である。其の古い羅馬の圓柱は陸地が歴史時代に或は隆起し、或は沈降したことを示す好箇の標幟である。

カプリの島の琅玕洞 (Grotta azzura) の奇觀を

聞いて見物に行つた人は、誰でも其の見榮もしない小さい洞穴の入口にさしかゝつて失望を禁じないであらうが、頭をかゝめて小舟を洞中に入れた瞬間、水も洞も人も悉く碧緑の色彩中に溶け去るの美觀に感嘆の聲を放たないものはあるまい。鷗外の「即興詩人」は讀んだ人は私が筆を改めて此の洞の美觀を叙することの愚を知つてゐる。琅玕洞は早く羅馬時代から知られて居つたが、中頃一時所在を忘れられたのを、百年程以前に再び發見せられたと言はれて居る。波浪の爲に穿たれた有史以前の石灰岩の洞穴の廣い口が海水の下に開いて居り、そこから碧翠の水を通じて光線が這入つて來るので、此の「フエヤリー、ランド」の如き美觀を現出するものである。

カプリの島は、ソレントの岬の續きである。而してソレントの半島の美しさはアマalfイのカプチニ僧院からの眺めに結晶せられて居る。佛伊のリヴィエラの海岸と並び稱せられる此の海岸の短亭曲浦に、シトロンの花咲く道をドラ

イヴする愉快は、一度経験したものゝ忘れ得ぬ所である。

八、シチリヤの海岸

サレルノから伊太利の半島の南端に走るカラブリヤの海岸は、再び「マレムマ」の海岸の繰返へしである。其間たいペースム (Paestum) に希臘の古祠が立つてゐるのは、彼處にエトルリヤの古墓の散在して居るのに對比す可きものと言へよう。併しエトルリヤの海岸が平遠な沙濱であるのに對しては、是は斷崖絶壁に富んで居つて、汽車は絶間なく墜道の中を走りつゞけるのである。

荒涼たるカラブリヤの海岸を離れて、メツシナの海峡を渡り、シチリヤの島に着くと、我々は再び南島の美はしい自然の懷に抱かれるのである。タオルミナ (Taormina) の高い町に登つて、其の古劇場の址から白扇を倒懸したエトナの火山を望む時、誰人が駿河灣頭の富士の姿を思出さるものがあらう。而してナポリ灣頭で死なかつた事を喜ばざるものはあるまい。

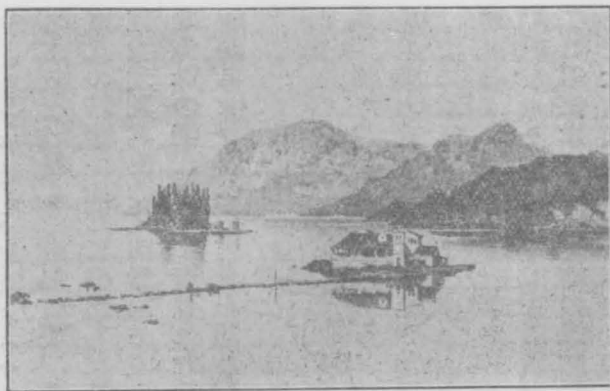
エトナの溶岩に襲はれたカタニヤの町を過ぎてシラクーザ (Siracusa) に着けば、我々は此處に再び希臘世界を見出すのである。其の廣漠たる歴史の大遺跡は、洵に世界史上の一偉觀である。更に南岸ジルデエンチとセデエスタに希臘の古建築の遺構を訪ねる人は、此の屈曲もない海岸線に船をこゝめた希臘の植民の冒險を恠しみ、北岸バレルモの港に入つては、此の天恵の港灣を利用したフェニキヤ人の着眼に敬服するであらう。

九、希臘の海岸

アドリヤ海の一港バリーから船出してイオニヤ海を渡つてコルフの島を経て希臘のバトラスに着いたのは丁度世界大戦争の最中、伊太利や希臘が戦争の仲間入りをするかしないかと言ふ大騒ぎの時であつた。

希臘の旅は汽車よりも多く馬背による外はない。到る處山脈が縦横して、小さい州に分たれて居る地形は、如何にも昔教科書で習つた通りであつて、是が希臘各州の地方的獨立をなさしめ

た原因であらうが、旅客は洵に困つた障碍物である。それ故希臘の海岸はたゞ雅典附近と、オリムピアからバレラス、コリントに到る間を汽車で見た丈



希臘のフルコ島

けであるが屈曲は多いが佳い港は少ない、今日の如き大船の時代となつて築港も出来ない貧乏國は、たゞ過去の文明を誇り得るのみであるのは同情に値する。併し忘れられないのはビレウスの港外遠くからも望みせられる雅典のアクロポリスの神々し

い姿である。その意外にも高く聳えて居る具合は東京から富士山を見た時と同じ感じがした。又たエーゲ海に突き出してゐるスニオンの岬こそは、世界中何處に斯んないやちこな海角があらうかと思はれる。白いパロスの大理石の希臘の古祠が燈臺の如く強い日の光を受けて閃めいて居る。紺青の空と紺青の水の間に。而してそこには疾風に帆を揚げて居る小舟が一つ二つ。

一〇、クレタの島

ビレウスの港を出て近くエヂナの島を右手に、遠くメロスの島を左手に、エゲヤの海をクレタの島に向つた我が船の、カンデヤの港に着いたのは次の日の早朝であつた。思つたよりも高く立つてゐるイダの靈峯は雪を頂いて我が前に現はれた。

クレタの島は東西の兩端に多少の屈曲がある外、北岸には此のカンデヤとカネヤの港に漸く船を着けることが出来る丈で、多くは斷崖の岸壁をなして居るらしい。南岸には古へ使徒パウロが船を逗めた「美き港」があるけれども、北

岸に比して更に悪い港であつたに違ひない。

併し北岸カンデヤの灣に近く古へのクノソス (Knossos) が榮え、南岸メスサラ灣に據つてフェストス (Phaistos) が起つて、希臘以前のミノス文化の精華が此處に發達したとすれば、矢張り東方埃及其他の文明諸國からの交通が此の哀れな海岸の港によつて行はれたのである。カンデヤからクノソスの宮址を訪ひ、更に馬を走らし

日本海々岸に於ける砂丘上の遺跡

梅原末治

一
日本海岸にある史前の遺跡には彼の越中の氷見郡大境にある洞窟の如き特殊なものがあつて上代に於ける我が國に稀な洞窟の住居事實を示してゐるのは學界に著聞する處である。然し乍らそれは從來見出された殆んど唯一の例である

て南ブシロリチ(イダ)の分水嶺を越え、メスサラの平原を望見して橄欖の叢林の波だつてゐるのを眺めわたした時の心地は何に譬へようか。フェストス、アーギヤ・トリアダの遺墟の麓、ミトロポリ川ボタモスの清流の畔、夾竹桃の花の優しく咲いてゐる蔭、衣洗ふ村嬢の姿は正に一幅の風景畫である。あゝ私が畫家であつたならば。(終)

から、これを以て同地の遺跡を特色づけることは固より不可能である。かゝる點からすると、本州の日本海岸―特に西半に於いて目立つ處の特徴のある遺跡として海濱に近い砂丘上の遺物散布地を擧げる事が穩當であらうと思ふ。是等の遺跡は當代の文化を表徴する石器と土器とを